変わり行くこの世界

青草須核

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
変わり行くこの世界

【Ｎコード】
Ｎ８１３２Ｓ

【作者名】
青草須核

【あらすじ】
いつも通り普通の日常。
そこにはいつもの楽しい仲間達。
しかしその平穏で幸せな日々も親友の失踪から全てが変わり始めていく。
世界は形を変えてオレ達に牙をむく。

世界は一体何を望んでいるのか？

オレ達は一体どうなってしまうのか？

そんな世界の中でオレ達は少しずつ前に進む。

最終的にオレ達は何を知り、どこに辿り着くのか……

プロローグ～周り始める～

何気ない平穏な日々も“神様のちょっとした気まぐれ”や“人間の常識に収まりきらない者の手”によって、時計の針が進むかのようにこの世界はいくらでも変わるものなんだと、“普通ではないものたち”は始めっからわかっていたのかもしれない。

「レ～はレモンのレ～、ミ～はみんなのミ～、ファ～はファイトのファ～さあ歌いましょ～♪」

そんな歌を１人の少年（オレ）が人のあまりいない道で歌いながら歩いていた。

オレの歳は１４、身長は１６０ぐらいで、人よりイケメンでもなければ、キモい顔をしているわけでもないと自負している。まあ、誇れることでもないんだけど。

再度、オレが小学１年生の音楽の教科書に載っていそうな歌を歌おうとした時、後ろの方から足音が聞こえてきた。

振り返って見ると、１人の少女がこちらに向かって走ってきている。

その少女はオレの隣まで来て止まると、「はぁはぁ」と呼吸を整えて顔を上げた。

とても可愛らしい顔をしている。オレの頭が正常ならばコイツの歳はオレと同じ１４歳で、身長は低めの１４０ほど、オレが知る限りでは一番の美少女である。

「ちょっと。聞こえなかったの？　ずっと呼んでたのにー」

その少女がオレに向かって言った。

「そんなに疲れたような顔してどうした？　寝不足か？　ストレスか？　恋の悩みか？」

オレは心配した様子でその少女に返事をした。

「違う！　走って来たから疲れたの！　コアのせいだからね！」

「人のせいにしたら駄目なんだぞ？　いけない子だね」

そういったオレをスルーして少女言う。

「そんなことより日曜、つまり明日私の家で加乃達と遊ぶんだけどコアも来ない？」

「ああっ、無視しやがった」

オレはそう言いながら大袈裟にうなだれる。

「来ないの？　うん、わかった」

「なんでそうなるんだ？　あっ、待って！　行かせて下さい！」

そう言ってオレは少女に向かって深く頭を下げた。

「じゃあ昼ご飯の後、……1時ぐらいに私の家に来てね」

「わかったー」
「じゃあ明日ね」
そう言うと少女はもと来た方へ走って行った。オレはその後ろ姿を右手を振りながら見送った。少女が角を曲がって見えなくなると前を向いて歩き出す。
「さてと、ん？」
前の方から白いマフラーをつけた少年が歩いてきた。その頭の上に白い猫がチョコンと乗っている。オレは「４月だけどそんなに寒いか？」と思ったが声には出さなかった。
マフラーをつけた少年は歩きながら上を見て、猫に言った。
「ここはどうかな？」
すると猫は「みゃー」と一言鳴いた。
「そうか～、まあ『アレ』が来るまで頑張ろう」
猫の鳴き声に返事を返すかのようにマフラーをつけた少年は言った。
その様子はまるで、少年と猫が会話をしているようだった。そして彼らはオレ気づいてない様子で横を通り過ぎて行った。
「……何だったんだ？」

――翌日――

オレは1軒家で2階建てのなかなか立派な家の前に居た。

オレは右手の人差し指をその家のチャイムボタンに近づけた。

「時間は……3、2、1」

カウントダウンをして腕時計が1時になったと同時に、オレはチャイムのボタンを押した。

『ピーンポーン』

……返事がない。もう1度押してみた。

『ピーンポーン』

……返事がない。もう1度押してみた。

『ピーンポーン』

「はーい」

返事があった。もう1度押してみた。

「聞こえてるよー」

返事があった。もう1度押してみた。

「聞こえてるってば！！」

「あっ、ごめんごめん。ぼーっとしてた」

「鍵開いてるから入って来てー」

「わかったー」

オレは石畳を進んで玄関のドアを開けると昨日会った少女が居た。

「巫女ん家に入るのめっちゃ久しぶりだなー、1年ぶりだっけ？」

「そのぐらいかもね。それより早く上がって。加乃と仁詞もそろそろ来るはずだから」

そう言って巫女は2階にある部屋にオレを案内した。

中に入ると可愛いぬいぐるみが置いてあることや全体的に綺麗なことから、ここが巫女の部屋だとわかった。巫女は基本的に綺麗好きなのだ。

巫女は、「飲み物とお菓子取ってくるから楽にして待ってて」と言って1階に降りていった。

「さてと。楽にしとくか」

しばらくして、巫女は飲み物とお菓子を持って2階に戻って来た。部屋にいるオレを見ると飲み物とお菓子を机に置いてオレに近付いて来た。

「…………コア」

「ん？　何？」

「何してるのかな？」

「横になってるんだよ」

そう言いながら横目に巫女を見る。

「なんで横になってるのかな？」

「お前が楽にしとけって言ったからだけど？」

「なんで私のベッドの中で横になってるのかな？」

「ここが一番寝心地が良いからだけど」

「馬鹿っーー！！」

オレは巫女の本気の右ストレートで右の頬を殴られた。

――5分後――

加乃と仁詞が巫女の家にきた。2人は中学校からの友達で、お互いに長所や短所を知り尽くしているほどの仲だ。特に加乃とは中学校1年からずっと同じクラスである。会った時から意気投合し、1年の1学期からずっと一緒に遊んでいるのをオレはしっかり記憶している。

2人が来てから何をするかと考えてオレ達はトランプを始めていた。

「む～……」

オレは山積みにされたトランプの束を睨みつけていた。

「よし、ダウト！」

そう言って、山積みにされたトランプの一番上のカードをめくった。トランプにはダイヤの５と書いてある。

「ハッズレ～」

「あー！　もう！　またかよ！」

そう言って山積みにされたカードを全部拾うと、その中から一枚を裏にして出した。

「はい、クイーン」

「それダウト」

間髪入れずに巫女がオレに宣告した。

「あー、もう！　なんでわかんだよ！」

「あははー」

その後もオレ達４人は、トランプで盛り上がって他にもいろんな種類の遊びをした。

結果はダウト１５回、大富豪２０回、ばば抜き5回ポーカー１３

回をやってオレは一度も勝つことが出来なかったのはなぜだろうか……。

そのあとはＷｉ◯をやったり、漫画を読んだりして春休み最後の日を充分に満喫したオレ達だった。

――7時３０分――

「くそ、遊びすぎた」

オレは夜になって暗くなった路地の中、家に向かっていた。人気はほとんどなく街灯の少しの明かりだけが道を照らしていた。

バサッ

そこに鳥が飛び立つときのような音がすぐ後ろで聞こえた。しかしオレはその音を気にせずに歩を進める。

「こんばんは」

声が聞こえて、オレはびっくりして後ろを振り返った。
そこに一人のとても可愛いらしい少女が居た。
その少女は人の手では作れないような漆黒の衣を着て、２本の触角のように見えるくせ毛（あほ毛？）と艶のあるほんのり紅い髪、紫外線などあたったことのないような綺麗な白い肌、紅くぱっちりとしていて引き込まれそうな瞳、とても可愛いが人間とは思えない、妖しいオーラを放っている少女だった。

一瞬の間彼女の美しさに見とれてしまったが、巫女という名の幼なじみのおかげかすぐに我に帰ることが出来た。

「こっ、こんばんは」

オレは女子と話すのはにがてな方で、慌てて返事をした。

「初めまして。私の名前は　　　　　　　」

おかしなことに名前の部分だけが口パクをしているかのように聞こえなかった。

「えっと、オレの名前は……」

「言わなくていい」

そう言って少女はオレの口を白い手で抑えた。

「……！？」

いつもなら驚きと恥ずかしさですぐに離れていただろう。しかしこのときなぜか意識が朦朧とし、気がつけば地面に横になっていた。

「お休みなさい、そしてさようなら。あなたの記憶の中には私は存在しなくなるから」

少女の言ったその言葉がオレの耳のなかに届いたが、意識が朦朧としたなかでその言葉の意味を理解することはできなかった。

街灯に照らされながら冷たいコンクリートに横になったままオレの意識は、少しずつ少しずつ闇に沈んでいった。

ほんの少し残った意識の中でオレは聞いた。

「あとはカノン君さえ戻せば全て計画通りにいくからね」

しかし、その言葉を理解することも結局はできなかった。

第1章～始業式～

『ピーーピーー』

オレは目覚まし時計の音で目を覚ました。目の前で音の発信源がずっと『ピーーピーー』と、うるさく鳴り続けている。

ガチャと目覚ましを止めてあたりを見まわすとマンガやゲーム、サッカーボールなどが散乱していた。

そこはまるで男子の部屋だった。実際、オレという中学生男子の部屋だった。

「んー。ふぁー」

オレは軽く伸びをしながら目覚まし時計の針を見た。

「もう朝か～」

現在の時間は6時50分。この目覚まし時計は高性能なことに日付、曜日がしっかりと示されていて4月7日（月）と表示されていた。

たしか今日は、

「コアー、今日は始業式でしょー」

ちょうど良いタイミングで1階から母さんの声が聞こえてきた。

「そうだ。今日は始業式だったな」

さすがに始業式の日に慌てて学校に駆け込むという失態を晒すことはしたくないので、すぐに1階に降りて朝食をとることにした。

1階に降りると、先に降りてきていた弟と妹がジャムを塗った食パンにかじりついていた。
この2人は同じ中学の1年生で双子（ついでに2卵性）である。
オレも椅子に座り食パンを食べようとしたときあることに気がつき、そのことをそのまま口に出した。

「なあ、オレ……昨日どうやって帰ってきた？」

頭が正常な奴がするようなの質問ではなかったが、昨日巫女の家を出て行ったあたりからの記憶が思い出せなかったので聞いた。
オレは真面目に聞いたのだがオレの家族の反応はというと、

「兄ちゃん頭大丈夫？」

と弟が不審者でも見るような目をして言った。

「起きてますかー？」

と妹がオレの顔の前で手を上下に振りながら言った。
朝方からこんなノリに付き合うのはめんどくさいので、無視してもう1度言った。

「だから、昨日オレどうやって帰ってきたのか聞いてるんだよ」

「自分の墓を探してるゾンビみたいな顔してた」

と弟が言った。

「痴漢の容疑で捕まった性犯罪者みたいな顔してたよ」

と弟の後に続いて妹が言った。そんなことを言うのでオレはこの話をやめる事にした。
それから学校に行く準備をして、弟達より少し早めに家を出て学校に向かった。
学校につくとオレはすぐに、新しくオレが在籍することになった3年A組を探した。

「3－A、A、A……ここだな」

『3年A組』とプレートが貼られた教室を見つけるとオレはガッーとドアを開けた。すると何人かの人がこちらを見た。視線が集まるのは苦手なので、すぐにドアを閉めてそそくさと自分の席を探して座った。知り合いが居ないかと軽く周りを見渡してみると、隣に巫女が座っていた。

「おー。巫女じゃん」

「あっ、コアー。同じクラスっていうのは知っていたけど席が隣だったんだー」

特にやることもないので暇つぶしに巫女とぺちゃくちゃと話をした。
8時15分になると1人の男の人が教室に入ってきた。

「おはよう」

担任であろう男の人が、給食台（黒板の前にある大きな机）の所に立った。
気づいたらもうすでにクラスの人は全員来ていた。
先生がいろいろ話をしたあと、始業式ということで体育館に行く

こととなった。

　始業式が終わって、何人かの生徒が教室に帰って来ていた。

　オレが席について１０秒ぐらいすると全員席につき始めた。どうやら先生が来るようだ。　先生は来ると始業式の前にいた給食台のところに行き、自己紹介を始めた。

「さっきも軽く自己紹介したが、オレがこのクラスの担任になるのでよろしく。担当科目は体育だ。それじゃー皆の名前をできるだけ早く覚えたいんで自己紹介してくれ。出席番号１番男子から始めてくれ」

　そう言ってパイプ椅子に腰をおろした。１番の男子生徒は困りながらもすぐに自己紹介を始めた。

　１人ずつ軽く自己紹介していき、とうとうオレの順番が回ってきた。

「えーっと、倉石周核（くらいしすこあ）と言います。よろしくお願いします」

と言って、軽く頭を下げてから自分の席についた。

それからどんどん順番が回り、隣の席の巫女の番まで回ってきた。

「私の名前は月光巫女（つきひかりみこ）と言います。これから今年１年の間よろしくお願いします」

　そう言って可愛らしく微笑んだ。すると周りから「可愛いな」や

ら「美少女」と声がひそひそと聞こえてきた。
確かに巫女はとても可愛いくて告られたことも2桁ほどあったはず。まあ、毎回何故か断って居るのだが……。そして、背が少し低いのもまた巫女の可愛らしさを引き立てているチャームポイントだ。
「こんな可愛い奴がオレの幼なじみなんだよなー。もしかして脈あり？」
と誰にも聞こえないように１人で呟いた。

――それから5分――

「これで今日は終わりだ。１０分後にＨＲがあるから教室に居とくように」
先生はそういうと、職員室の方に向かって歩いて行った。巫女と喋ろうかと思ったがトイレに向かったので暇になり眠ることにした。
すると、
「なんだ？　初日から眠いのか？」
気がつくと隣にはオレの友達、長島（ながしま）加乃（かの）が立っていた。
「ようカヌー」
オレは頭を机に沈めながら加乃の顔も見ずに挨拶をした。

「カヌーじゃねぇよ」

「ようカヤック」

「カヤックでもねぇよ」

「ようカ以下略」

「喧嘩売ってんのか？」

「サインは受け付けねーぞ」

オレがそう言った瞬間、加乃はオレに向かって本気でヘッドロックを発動した。

「がっ！　……しっ、死ぬ！」

しかし加乃はヘッドロックを全く解こうとしない。本当に落ちそうになったので、ギブアップの意味で壁をパンパンと叩いた。意味がしっかり通じたようでヘッドロックは解除された。

「ふーっ、ふーっ。死ぬところだった……」

「まあ、自業自得だな」

「どこらへんが!?」

名前を1文字略しただけで死にかけたことのどこらへんが自業自得と言うのだ。ったく、コイツといると酸素の大切さが身にしみて

よくわかる。

「なんか用か？」

「馬鹿が眠ろうとしてるから起こしに来た」

「なんだ、嫌がらせかよ……」

オレはそう言ってまた顔を机に沈めた。

「まあそんなことよりせっかくの新クラスだ。クラスメイトに軽く挨拶しようぜ」

そういうばコイツもオレと同じクラスだったな。さっき自己紹介してた記憶が頭の片隅に残っている。

「挨拶って……一発芸でもやるってことか？」

「違う。とりあえず話かけやすそうな奴と軽く喋ろってことだ」

「わかったよ。でもオレは女子なんかとは話せないぞ？」

オレは２ｍほど先でワイワイと話している女子の集団を目で見ながら言った。

「わかってる。アイツだよアイツ、とりあえずアイツに話しかけてみようぜ」

そういって加乃が示した方には暇そうにして外を眺めている白いマフラーをつけた少年がいた。

「アイツ、どっかで見かけたような……」

「早く話しかけようぜ」

加乃はそう言って少年の方へ向かった。

「あっ、ああ」

慌てて返事をして加乃の後を追った。

「おっス。オレは加乃、よろしくな。で、こっちの眠そうに欠伸してるのが周核。えーっと、お前は……」

「ボクは光。白井光（しらいひかる）って言うんだ。よろしくね」

「光か、了解」

とここでオレは気になって言った。

「マフラー着けてるけど寒いの？」

この時期に学ランにマフラーと言う格好は珍しいと思うのだ。

「少し、ね」

「まあ、とりあえずよろしくな」

「うん」

と一段落ついたところで担任の先生が教室に戻って来た。

「今日はこれで終わりだ。各自帰宅していいぞ。それと、白井は少し残ってくれ。じゃー明日も８時１５分までに学校に来るように」

そう言ってＨＲは終わった。

「先生、何か？」

ＨＲが終わり、光が先生の所へ行き聞いた。オレはそれを見て光について行ってみた。

「来てくれ」

先生がそう言って向かったところは生徒指導室だった。

「連れてきたぞ」

「来たか」

「じゃ、頼んだ」

担任の先生は去っていった。生徒指導の先生であろう人は光のマフラーを見て言った。

「マフラーはこの学校では違反なんではずしてもらえないかな？」

「このマフラーはとっても大切なものなんです」

「それでも学校でマフラーは……」

「とっても大切なものなんです」

生徒指導の先生は困って黙ってしまった。

「うーん、……はあ～」

――1週間後――

オレはいつもの時間に学校に着くと、3年D組で1人のバカがパントマイムをしているのを目撃した。

そいつはオレの友達の鳥花仁詞(とりばなにし)だった。こいつはオレ達の学年ではバカな奴ということで有名なほどのバカだ。

そして、周りではたくさんの人がそのバカな行為を見て楽しんでいた。

その集団の中に加乃が混じっていた。

「よう」

右手を軽く上げながら加乃に声をかけた。

「おー、周核じゃねぇか。お前もパントマイムやってきたらどうだ？」

「残念。オレにはあいにく羞恥心があるんだ」

「そうだったな」

そんな話をドアの前に立って話していると、

「……邪魔だ」

低いドスのきいた声が聞こえてきた。その声が聞こえた瞬間、集団の中にいた女子達は、

「きゃあああああ！」

やら、

「俊雅様ぁー！」

と黄色い声を出した。

そう、この声の主はイケメン＆頭脳明晰＆運動神経の超人いわゆる“天才”の代名詞、鳳凰俊雅（ほうおうしゅんが）である。

「あ、すまねー」

そう言ってオレはどいた。俊雅は周りの言葉を全く無視して席につき、タイトルがオレには読めない漢字の本を読み始めた。

「いいよな天才は女子にめちゃくちゃモテて」

「そうだなー。オレなんか……」

「お前は彼女いただろ」

妬みを込めた目でオレは加乃を睨みつける。

「バレてたか。すごいな、良くわかったな周核」

「天才になりて〜。それかモテて〜」

「周核は結構モテてる方だと思うけどなー」

「え？」

声のした方を見るといつの間にか巫女がいた。

「オレは全然モテねーよ」

「そんなことないと思うけどなー」

「絶対ある！」

「何でそんなに自信満々に言ってんだよ」

そう言って加乃がオレの頭をパチンと叩いた。

「いてっ。コノヤロー！」

「ふははははは」

「オレにも殴らせろー！」

そう言ってオレは逃げていった加乃を追いかけて、巫女を残したまま加乃の逃げた教室の方へ走って行ってた。

残った巫女は、

「はぁ～あ」

と1つ大きなため息をついたのが微妙に聞こえた。

オレが加乃を追いかけて教室に行くとなにもなかったような顔をして、

「おはようございます。周核様、朝のお目覚めにハーブティーでもいかがでしょうか？」

と言ってきた。オレはこれに乗ってしまうキャラだ。

「一杯貰おうか。それからサンドイッチも頼む。パンのみみは取っておいてくれ」

「かしこまりました」

と、加乃が言ったところでなぜかコイツが出現した。

「周核～。頭大丈夫～？」

さっきまでD組でパントマイムをしていた仁詞（バカ）である。

「お前にだけは言われたくない」

「ひど～。こうなったら飛び降り自殺の刑だね」

「飛び降り自殺！？」

オレは仁詞にベランダまで連れてこられた。そしてなんと本気で

オレを落とそうとし始めたではないか！

「まっ、待て！　これは自殺じゃなくて他殺だろ！　てか恐いってマジで恐いんだって！」

「じゃあ3回まわってコニャニャチワって言って〜」

「嫌だ！　絶対に嫌だ！！」

「じゃあやっぱり飛び降りだね〜」

「わ、わかった。言うから！」

その後はとてもオレの口からは言えないさんざんな結果だった。

まっ暗な夜に星を見ながら、ボクは親友と一緒に丘の上で寝そべっていた。

「ありがとう。ここに連れてきてくれて」

そうボクは親友の黒斗(こと)に言った。ボクは7歳くらいで、親友の彼も7歳くらいだった。

「光のためだ。どうってことないよ」

と黒斗は笑顔で言う。

「こんなに綺麗な星空は初めてみたよ。ボクの夢が1つ叶った」

今まで見たなかで最もといっていいほどに綺麗な星空を見上げながら言った。

「それならオレの夢だって1つ叶ったよ」

「夢?」

「うん。親友の夢を叶えるっていう夢」

そう言いながらボクに笑顔を向けてくる。

「黒斗、本当にありがとね」

「どう致しまして」

黒斗がそう言うと流れ星が1つ現れてすぐに消えた。

「大きくなってもずっと親友でいようね」

「もちろん。光とオレはずっと親友だ」

ボクは黒斗の手を握った。

「手を握るなんて女の子みたいだな」

「ご、ごめん」

そう言ってボクは慌てて手を離そうとした。しかし黒斗がボクの手をギュッと握った。

「離さなくていいよ」

「……うん」

ボクは照れて黙りこんだ。静寂の中でボクは顔上げて星空を見つめる。

「光、今日はプレゼントがあるんだ」

「プレゼント？」

「このマフラーだ」

ボクの死角となっていた位置から白いマフラーを取り出した。

「これ、ボクが前欲しいって言ったやつ？」

「うん、そう」

「ありがとう。今着けていい？」

「いいよ」

ボクは首にマフラーを巻いて黒斗に言った。

「いつも巻いとくね、このマフラー」

「うん」

ボクは嬉しくて星空を見上げた。それと同時にバァーンと、音がして目の前が真っ白になった。

「はっ！」

オレは目を覚ました。

「なんだ……今の夢は？」

今見た夢は完全にオレの夢ではなかった。その証拠にオレの記憶にはないし、オレは夢のなかで光と呼ばれていた。

「もしかして、光の夢？」

オレが光の方を見ると、光もさっきまで寝ていたようだった。

「コアおはよう」

声がした方見るとそこに巫女がいた。

「ん？　なんだ巫女か」

「なんだじゃないよ。もう４校時終わったよ」

「えっ！　……マジで？」

「まじで」

「そうなのか〜。オレ何時から寝てた？」

「４校時の始めから」

と言って可愛いらしく指を４本立てた。確か、今日の授業は４校時で終わりだ。

と後ろから肩を叩かれたので振り返って見ると人差し指が頬にあたった。

「引っ掛かったぜ〜」

「ふぁ〜帰るか……」

「無視すんじゃねー！」

とそこへ仁詞（疫病神）が現れた。

「帰ろうよ〜」

「ああ、そうだな」

「じゃあさ〜、帰ったらすぐに周核の家に集合〜ってことで決定〜」

「了解」

「わかった」

と加乃と巫女が仁詞の言ったことに返事をした。

「待て待て待て！　オレの許可も無しに勝手に決めるんじゃねえよ」

と言うと、

「じゃあ～、周核は家で待っていてよ～」

と無視された。

「仁～詞～！」

「が8！！」

「は？」

「2×4＝8でしょ～」

「は？」

「かけ算九九を忘れたの～？」

「は？」

「じゃあ待っててよ～」

と言った。結局オレは「は？」としか言えなかった。

そこには1人の少年とたくさんの人影の姿があった。しかし、人

影は人間とは少し違っていた。なぜならそれらの人影は目が赤く、肉食獣のように歯が鋭いのだった。
少年は頭に乗せている白い猫に話しかけた。

「ここにも来たんだね」

それに対して猫は人間の言語で返答をした。

「光、いつかはこうなるってわかっていたことにゃ」

「そうだね。……《光剣ライトブレス》」

光がそう言うと右手に光が集まって剣を形作った。

「《光銃ライトエフェクト》」

続けてそう言うと左手に光が集まって銃を形作った。

「ごめんね。ボクも本当はこんな事したくないんだ」

悲しそうな顔で光がそう言うと剣と銃を構えた。

「おぉぉおおぉぉぉ！」

“人”ではない者達が光に襲いかかっていく。
しかし光の2メートル以内に入った1人が吹き飛んだ。胸に斬られたあとがあり、黒い血が噴き出す。

「第5の構え《空間の陣》」

光が小さいが響く声でそう言った。

「おぉぉおおぉぉぉ！」

「うぉお！」

人影が一斉に襲いかかる。しかし2メートル以内に1人として入ることができないまま、光の周りで黒い血が舞う。

四方八方から襲いかかろうとも、光から半径2メートル以内には斬られたあとの血すらも入ることはない。

1人が光から逃げよう走り出した。しかし15メートルを超えると頭が吹き飛んだ。

「……！？」

“人”ではない者達が驚いた。

光が左手に持っている《光銃ライトエフェクト》から煙がでている。

「本当にごめんね」

10秒後には光に襲いかかった者、光から逃げようとした者、全員が黒い血の血だまりを作り息をしていなかった。

「光……大丈夫にゃ？」

「うん。白那(しろな)は大丈夫？」

「にゃ」

「そう。良かった」
気がつけば周りにいた“人”ではない者達は灰となって消えていた。
「入れ！　オレの神シュート！！」
「入るなぁー！！」
加乃がバスケットリングの下からおもいっきり投げたボールが反対側のバスケットリングへと飛んでいく。そして、そのボールに向かってオレは叫んだ。しかしそのままボールはリングへと吸い込まれるように入っていった。
「ゴール！」
「ぎゃあああぁぁぁ！！」
ボールがリングに入ったのを見たとたんにオレは頭を抱え込んだ。
「うぅー。なんで……なんでだぁーー！！」
人目も気にせずオレは絶叫した。すると満面の笑みを浮かべた加乃と仁詞と巫女がオレの周りに集まってきた。

「「「バッツゲーム♪バッツゲーム♪」」」

「うわぁ、うぜー！　しかも同じチームであるはずの仁詞まで言ってるし……」

「さて、バツゲームは『勝ったチームのキャプテンが負けたチームのキャプテンに１つ命令する』だったよな？」

加乃がニヤニヤしながら言った。それにオレは答えた。

「１０円おごるじゃなかったっけ？　……っ！　待ってぇ！　オレのバッグを人ん家のベランダに投げ入れないでぇー！！」

「バツゲームは何だった？」

「スクワット２０回」

「死ね！！」

「ぐぅはっ……！！」

加乃がおもいっきりオレの背中を踏みつけた。そのせいでコンクリートの上でうつ伏せの状態になる。おもいっきり踏みつけられたので息が！

「ぐぇ……ほぐぅ……ぷはぁ！」

「さあ、痛い目にあいたくなかったら言いな」

「もう痛いめにあっ――――ぎゃあああ！　オレの手首が１６０℃に

！！」

「さあ、痛い目にあいたくなかったらさっさと言いな」

「だからもう痛い目にぃぃぃぃ！　オレの指でTの文字が……！！」

「さあ、痛い目にあいたくなかったらさっさと言いな」

もうここは肯定するしかなさそうだ……。

「…………加乃の言ったとおりです」

うぅ……、どんなバツゲームをさせられるのだろう……。てゆうか、さっきのでもう充分だろ。

とりあえずオレなら

?明日教室で一発ギャグ

?全員に飲み物おごり

?1日パシリ

ってところだが……。

——1時間後——

「ねぇ、早く帰ろうよー」

「どうした？　そんなに帰りたがって」

オレ達は今、喫茶店に来ていた。これはバツゲームの一環で来ている。そのバツゲームとはみんなに飯をおごるためではなく、

「このカツラと服とスカートの着け心地が悪いよ」

仁詞の考えた最悪のバツゲームだった。

「良いじゃない。可愛いし、これならだれも女装だって気づかないよ」

「やっぱりこのアイデアにして良かったよ～」

「ああ。仁詞のこのアイデアはめっちゃウケる」

「うぅー、なんでこんなに似合ってんだぁー」

加乃達がずっとニヤニヤと笑っている。

と、そこで巫女がウェイトレスを呼んだ。

「あのー、追加注文お願いします」

はーい。と言ってウェイトレスがこっちに来る。

「ショートケーキ１つお願いします。……コアも何かいる？」

巫女ぉぉ！　オレに話を振るなぁぁ！　女装してるのバレたら変態と思われて町中に広がっちゃうだろがぁぁぁぁ！　とっ、とりあえず、

「べっ、別に何もいらないんだからねっ！」

女装だとバレないように声を少し高くする。……ってその前にこれじゃあツンデレじゃないか！！　ウェイトレスが声を殺して笑ってる！！　何かまともなこと言わないと！

「やっぱりレモンティー下さい！！」

「はい。ショートケーキとレモンティーですね。他に何かいりますか？」

いらねぇーっての！　マジで話かけないでー！　このままじゃ喉にたくさんの負担がっ！！

「いぃぃです……」

「わかりました」

そう言うとウェイトレスはクスクスと笑いながら歩き去っていった。すると周りで加乃と巫女と仁詞が口をおさえて震えている。

震えている理由はたぶん、

?食べ物が腹にあたった

?クーラーの風が冷たい

?オレとウェイトレスの会話を見て笑っている

?宇宙人にメタモルフォーゼしようとしている

さて、ここは選択問題のセオリーどおり消去法でいくとするか。

?は普通に考えてないから×。?は3人同時になることは無いだろうから×。?と?か……、どちらだろうか。?は……口をおさえる理由が思いつかない。

つまり、………帰ったら殺るか。

その結果が出るのとウェイトレスが来るのは同時だった。

オレは家に帰って来ていた。

「今日の周核の女装はウケたな～」

家の中で今日の事を思い出しオレはニヤニヤしていた。

「まだ誰も帰って来てないな……」

両親は基本１２時過ぎに帰ってくるし、姉貴はバイトで１０時過ぎだ。飯作るのもめんどくさいし今日は9時だがもう寝るか。オレは家中の電気を消して自分の部屋のベッドへと向かった。疲れていたのかベッドに入るとすぐに眠りについた。

「どうやら寝ちゃったみたいね」

そこに紅い髪のとても可愛い少女が現れた。

「カノン君、あなたはこの世界を変えるべき方だからね」

そう言うと寝ている加乃に近づいていき加乃の顔に顔を近づけて言った。

「さあ、始めて」

そう言うと少女は自分の唇を加乃の唇に重ねた。

『ピピピピピピピ』
うるせぇな～。オレはまだねみぃんだよ。
『ピピピピピピピ』
ガチャと、目覚まし時計の上についているボタンを押した。

「朝だよー。朝だよー」

目覚まし時計を止めると次は姉貴の声が聞こえてきた。

「うるせぇ。黙れバカ姉貴が」

「んっ？　かのくん朝からご機嫌ななめ？」

「毎日同じこと言ってて飽きないのか……たく」

「朝ご飯はもうできてるから先に降りとくよー」

「わぁったよ」

全くなんで毎日6時に起きないと行けねーんだよ。こっから10分で着くというのによ。
目覚まし時計の針は6時2分を指していた。もう1度寝るといろんな意味でめんどくさいことになるので、朝食を食べるために下に降りた。
黙々と朝食を食べて歯磨きを済ませると時間は6時30分を指していた。今から学校に行っても暇になるので、朝風呂に入ることにした。
朝には少し冷ための水を浴びるのが気持ちいいと自分の中で決まっているのでお湯の温度を下げた。最近長くなってきた髪をシャンプーで洗い、体を石鹸で出した泡で洗っていく。最後にまた冷ため

の水を浴びてから風呂場を出た。
バスタオルで髪を軽く拭き、体の上から順番に拭いていく。体をしっかり拭いてから、まだ湿っている髪をドライヤーで乾かしていく。
するとそこで鏡を見てあることに気がついた。
昨日は早く眠ったおかげで無駄につやつやな肌、ある程度手入れをしている少し茶色の髪、しっかり睡眠とっているので隈のない茶色の瞳。
そんなことはどうでもいい。
問題は目がなぜかひどく充血していることだ。
「なんでこんなになってんだ……」
しかし結局はどうしようもなく、少し横になってから家を出た。
その時刻は7時30分だった。
欠伸をしながら学校に向かって歩いていると、
「加乃ー」
と後ろから女の声が聞こえてきた。
後ろを振り返ってみると巫女がこちらに向かって手を振っていた。
「よう」
「おはよ」
巫女がオレの所までくると何を言うまでもなく並んで歩き出す。
「お前っていつもこんなに早くから学校に行ってんのか？」

「今日はたまたまだよ」

「そうか」

「そういえば最近何か変わったことない？」

変わってこと……。目が充血していること以外には思いつかない。

「特にねぇけど……どうかしたのか？」

「ううん。何でもない。気にしないで」

何かおかしい気が……する。

何かつじつまが合わないような……歯車がきれいにかみ合わないような……そんな変な違和感がする。

なんだ……。

なんなんだ……。

これは一体なんなんだ！？

「……乃？」

オレの血がオレに何かを訴えているかのように感じる。

「どう……加乃？」

くそっ！　何か大事な、大切なことを思い出せそうなのに！　喉のところまできてるってのに！！

「どうかしたの加乃？」

「うん？」

「大丈夫？」

巫女が心配そうな顔をしながら上目遣いに見てくる。

「ん？　……ああ、大丈夫だ」

「びっくりしたー。何回名前を呼んでも返事しないからさー、どうかしたのかと思ったよー」

「ちょっと考えごとしてたんだよ」

「んー、何？　気になるな～」

巫女が笑いながらまたも上目遣いしながら聞いてくる。

「何でもねーよ」

「えー！」

「本当に何でもねーよ」

そう言ってそっぽを向く。

「あっ、学校だ」

「急に話変わったなおい」

「地球温暖化説と地球寒冷化説の話だっけ？」

「そんな世界レベルの話はしてねぇよ！　……あーだりぃ、ん？
……あれはコアじゃねーか」

４０ｍぐらい先に周核が歩いていた。そこで「コアー」と呼ぼう
とした瞬間、

世界が変わった

景色が一変し、登校していた何名かの人達が急に消えた。

そして同時に隣にいた巫女も消えた。

「なっ……！！」

周核は消えていないようだが、誰もが世界が変わり、人が消えた
ことに気づいていないようだった。
その証拠に先ほどまで学校であった“大きな黒い塊”に向かって
歩いていく。

「う…うそ……だろ？」

「加乃、どうかしたの？」

そう、隣から聞こえてきた。
その声には聞き覚えがあった。
その声は巫女の声だ。
そしてその声は、

巫女が先ほどまでいた場所から聞こえた

その瞬間、オレの中の異常に対する許容量が限界を超え破裂した。

「あああぁぁぁぁ！！」

オレは今来た方向に向かって逃げ出すように駆け出した。

「……！？」

周りの人達が驚いたがその頃にはもう叫び声の主はどこかに消えてしまっていた。

叫び声の主のいなくなったその場所で、

「やはりあの目はもう気づいたか……」

人のいない場所から聞こえたその声は周りにいた誰の耳にも入らなかった。

周核はこの日、いつもより１０分ほど早めに家を出ていた。

すると、

「ああああぁぁぁぁ！！」

という狂ってしまったような、壊れてしまった人が出しそうな声

を聞いた。オレは驚いてすぐに声のする方を振り向いた。みると4０ｍほど先に声の主がいた。
そこにいた人物はオレがよく知っている人物だった。

「加乃……？」

オレはそれをみて加乃のところへ行こうとしたとき、加乃はまるでオレから逃げるかのようにして反対方向に走り出した。
慌てて追いかけようとするが加乃は１００ｍを１１秒台で走るような奴だ。オレは１４秒台である。
そういうわけでどんどん離されていく。

「ハアハア、……アイツどうしたんだよ？」

「コア？」

急に横から声をかけられた。見てみるとそこには巫女がいた。

「いつから居たんだ？」

「ずっと居たよ。加乃の隣にね」

「そうなのか……」

どうやら自分では気づかなかったが加乃の隣に居たらしい。
……絶叫した加乃の隣に。

「アイツは……どうしたんだ？」

「……わかんない」

「……そうだ、電話してみるか」

ポケットからケータイを取り出してアドレス帳から『加乃』を選んで電話をかける。

『プルルルプルルル』

「…………」

……でない。

良く考えてみればいまだにあんな状態だったとしたらでないだろう。とりあえずメールだけでも送ることにした。

「……これでいいか」

すぐにでも探しに行きたい気持ちがあったが、

「もう15分になるよ」

そう巫女に言われて後ろを見たまま学校に入って行った。

「コアー」

「うん……」

「6限終わったよー」

「うん……」

「帰らないの？」

「うん……」

「えー！？」

「うん……」

「1＋1＝2？」

「うん……」

「2＋2＝471156？」

「うん……」

「はぁ～」

「うん……」

という感じでオレは1日中こんな感じで上の空だった。

「顔挙げてよー！」

「うん……」

と言っても頬を机につけたまま横のなにもない空間をぼんやりし

た目で見ていた。
そこで巫女はあることを思いつき言った。「コア、加乃の家に行ってみない？」
オレは、そうだ！　と思いガバッと立ち上がった。とりあえずアイツが行きそうな所へ行ってみよう。
オレは鞄を取ると教室を飛び出した。

「待ってよー！」

後ろから巫女の声が聞こえたがオレはそのまま走り続けた。

――5分後――

「ハァハァハァ……」

オレは加乃の家の前に立っていた。巫女はまだ来ていない。オレの全力疾走についてこれなかったのだろう。
巫女を待たずに門扉を開けるとキィーと音をたてた。そのまま石畳を歩いて家のドアの前まで行った。加乃の家は裕福なようで、一軒家としてはとても広い敷地とそれにふさわしい家。ドアもとても美しい装飾が施されている。
が、今のオレはそんなものにも目もくれずにカメラとマイク付きのチャイムのボタンへと人差し指を伸ばした。
『ピーンポーン』
と、ありきたりな音が聞こえて5秒ぐらいするとマイク越しに返事が聞こえてきた。

「はーい」

「あの、加乃の友達の周核ですけど加乃は居ますか？」
「すみませんね～。加乃はまだ家に帰って来てないわよ」
どうやら加乃は家に帰って来てはいないようだ。
「じゃあ加乃君が帰ってきたら、周核が来てたと伝えて下さい」
「わかりました」
ぷっ、と音がして通信が切れた。さて、これからいったいどうしようか……。
オレは少し考えて自分の家の方に向きを変えて歩き出した。
「コアー」
と前から息を切らしながら巫女が走ってきた。
「遅かったな」
「ハァハァハァ、……コア速すぎるよ。で、どうだった？　加乃いた？」
「家には居なかったよ……。とりあえず1度家に帰ろうと思う」
「そう、わかった」
オレと巫女は横に並び家のある方へ向かった。
いったい加乃はどうしたんだろうか。いったい加乃はどこへ行ったのだろうか。

どうして……。
なんで……。
どこへ……。
家へ向かっている間、オレはずっと加乃の失踪の事だけを考えていた。
しかし頭の中にはなぜ？　どうして？　と疑問の言葉だけがただ出てくるだけで答えは出てこなかった。

深夜ＡＭ１：００――

「ふぅー、ふぅー。寒……」
加乃は廃墟となったアパートに居た。とてもボロボロで窓は全て割れており、玄関にはドアさえなかった。
今は４月の末。こんな風通しの良すぎるところは寒く、冷気が満ちていた。
とは言っても加乃にはここがアパートだということはまったくわからなかった。
今の加乃がいる世界というのは常人と同じ世界だが、見えている世界は全くもって違うものだった。

「どこなんだよここは……」

そして、普通の中学3年生である加乃にはその異常に適応することはまったく出来なかった。

「巫女の奴、どうなっちまったんだ……」

昼間の時の事を思い出しながら加乃はつぶやいた。

『ウィィィー』

「………！」

急にどこからか何かの音が聞こえてきた。

「……なんの音だ？」

周りを見てみると、後ろの方に何か四角の物があった。どうやらこれから音が出ているようだ。

「これは……？」

その四角ものにはいろんなものがセットになって1つの物のようだ。

なんだコレは？

機械みたいだが……。

昔のテレビか？

……。

………。

…………！

PC（パーソナルナルコンピュータ）だ！！　と加乃が答えを出すのと同時にPCに文字が出てきた。

〔君はカノン君だよね？〕

急に出てきた歪んだ文字はそんな言葉が書かれていた。
カノン？　誰だ？
オレはとりあえず［違う］と打った。
〔ん？　そうなの？　まあいいや〕
［お前は誰だ？］
〔それは次回のお楽しみ～〕
［これは何かの物語なのか！？］
〔ウソだよ～☆〕
［ウソなのかよ！！　それに☆とかうぜーよ！！］
〔次回でも僕の正体は分からないよ～〕
［そっちかよ！！］
〔ついでに次回で君は死ぬよー〕
［それもウソだよな！？］
〔ウソだよ～。君は次回から出てこないよ～〕
オレは必死に頼んだ。
［そっちの方がかなり悲しいわ！！］

「Ｂａｙｔｈｅｗａｙ」

「Ｂａｙｔｈｅｗａｙ！？」

「ところでダイ〇ードって映画あるけどｄｉｅｈａｒｄ（一生懸命死ぬ）って意味なのかな～？」

「あれは自殺志願者の映画じゃないぞ！」

「失礼、かみました」

「別にかんでないだろ」

「かみまみた」

「今初めてかんだよ！！」

「かみまくった」

「まだ一回しかかんでねぇよ！！　てかパソコンに文字打ってんのに噛むとかねぇよ！！」

「ところで可良々木さん」

「こざとへんが抜けてるぞ。僕の名前は阿良〇木……じゃねぇよ！！」

「おふざけはここまで」

「あ、ああ」

〔君にはこの世界違って……おかしく見える？〕

突然聞かれた質問はオレを仰天させるものだった。

え！？　なんでわかるんだ？　もしかしてコイツにも世界がおかしく見えているのか！？

〔もしかしてお前にもおかしく見えているのか？〕

〔ううん〕

〔じゃあなんでわかるんだ？〕

〔その世界のことはよく知っているからさ〕

〔どういう意味だ？〕

〔今の君じゃ理解出来ないよ〕

〔？？？〕

〔とりあえず今は分からないってこと。それより良い魔法を教えてあげるよ〕

〔魔法？〕

〔両目を閉じて、《チェ・ルード・オール》って唱えてみて〕

〔それを唱えるとどうなるんだ？〕

〔やってからのお楽しみ〕

とりあえずやってみるか。さすがに死ぬわけじゃねーしな。……もしかして今のって死亡フラグ？
まあ、そんなことは置いといてやってみるか。

《チェ・ルード・オール》

そう言って、オレはゆっくりと目を開いた。

「なっ、なんだ！？」

世界はまたもや変わってしまった。否、世界は半分が元に戻り半分は変わっていなかった。
つまり、

「左目だけが元に戻ってる！」

オレはすぐにPCに文字を打った。

〔なんで元に戻ってるんだ！？〕

〔さあ？　開発したの僕じゃないし……〕

〔すげぇなおい！〕

〔ついでにこの間は左目が銀色になるから気をつけて〕

〔マジかよ！！　かっけぇーな！！〕

〔ついでにこの魔法のことは絶対誰にも言ったらダメだからね〕

〔了解！〕

そう打って５秒ぐらいするとウィンと音を立ててＰＣの電源が切れた。　アイツは変な奴だけど信用しても良さそうな奴だな。そう思った瞬間に大きく揺れ、またもや世界は変わった。

そして今度は全ての人間が気づくほどだった。

「この世界の３つの秘宝『ブラッドルビー』『スカイサファイア』『フォーレストエメラルド』をこの台座にはめたならば世界は始まりの始まりを迎えるだろう」

と言った。その光でできた人型の奴はそう言った。

この状況を説明するためには、３０分前に話始めたほうが良いだろう。

この日朝起きるとオレは自分の家のベッドではなくて、草原に居た。

「なんじゃこりゃーー！！」

オレは叫んだ。

朝起きての第一声がこの叫び声だった。

「兄ちゃんうぜー」

隣の方から声が聞こえてきた。見てみると眠そうに目をこすって

いる弟がいた。

「おい、起きてみろ！」

「んー、どうしたの？」

「周り見ろって！」

「ん？　ここはどこ？」

「オレが知るか！！　そんなことより母さん達はどこだ？」

「さあ？　ん、あそこに……」

妹がいた。というよりは寝ているのだろう。しかしあれは、

「なんでアイツは立ったまま寝てんだ？」

「さあ？　オレに聞かれても、さきに起きたのは兄ちゃんだし」

「母さんは……いないみたいだな」

周りをざっと見渡してみるがオレ達兄弟以外はいないみたいだ。

「兄ちゃん、とりあえずアイツ起こしたほうがいいんじゃん？」

「そうだな」

オレは妹のところに行った。

「おい」

そう言って妹を揺すると傾いて倒れた。

「いたっ！」

「おはよ。朝だぞ」

「お兄ちゃん、イジメ！？　乙女の頭にたんこぶができちゃう！」

「良かったな。それよりお前ら……」

オレはあることに気づいて、黙った。

「ん？　何？」

「お前らの名前って…………何だっけ？」

「ひっでー！」

「ひっどーい！」

声がハモった。けっこう声似てるな。てゆうか、そんなことは今はどうでもいいことなんだよな。

「オレの名前は……」

「私の名前は……」

…………。2人が同時に沈黙した。

おい、まさか……。

「「なんだっけ？」」

今度もハモった。言ってる言葉も同じ。いうタイミングもぴったり～って何言ってるんだオレは。

「おいおい。冗談ですよね！　神よ！　ウソだと言っておくれ！」

そこには天に向かって大きな声で叫んでいる1人の男子中学生と、その様子を見てちょっと引き気味になっているその中学生の弟と妹の姿があった。

きっとオレじゃない誰かだと願いたい。

「てか、……兄ちゃんの名前ってなんだっけ？」

「オレの名前は……」

「…………」

「…………」

「やべぇ！　思い出せねぇ！　オレの名前なんだっけ！！」

くそ！　まさか、オレもなのかよ！！

「なんだっけ！　なんだっけ！　なんだっけ！」

オレが30回ほど「なんだっけ！」と叫んだ後に弟が口を開いた。

「ところで兄ちゃん」

「ん？　どうした我が弟よ？」

「あれって街じゃね？」

「よし！　行くぞ！」

「元に戻るの早！？」

ということで気づいたらまた寝ていた妹を起こして、町に行くことにした。

テクテク。
テクテク。
テクテク。
テクテク。
テクテク。
テクテク。

到着！！

この間約20分でした。

「ん？　あっちに人が集まってるな……」

「兄ちゃん、いってみようぜ」

それでオレ達はそこへ向かった。そしたらそこに光でできた人型の奴がいた。

そいつが長ったらしく話したことをまとめてみると、

1、この世界はオレ達がいた世界とゲームが混ざってしまったような世界

2、いろんな【CLASS】と呼ばれるものがあり、それに就くと【スキル】と呼ばれる人間を超えた力を使えるようになる事
3、この世界に3つある秘宝をオレの目の前にある台座に納めると何かが起こるということ
4、この世界で死んだ場合は本当に死を迎えてしまうこと

そうして、オレ達の『ゲーム』が始まりを迎えた。

第2章～人生は神ゲー？～

ゲーム……オレも何度か入ってみたいと思ったが、中学生になってからはあまりそう思うこともなかった。その理由は精神が成長したからなどではなく、単純に毎日が楽しかったからだろう。
そして今目の前で行っていることは昔の願いを具現化したものではなく、異世界と化したオレの世界だと言う。そんな異常をオレは理解など出来ていなかった。

「どうなってるんだ！」

誰もが思っているであろうことをオレは人の形をした光にぶつけた。しかしソイツはオレを一瞬だけ見た後、空気に溶けるようにして姿を消した。
周りの人は叫んだオレを見たが、すぐに目を逸らす。

「お兄ちゃん……」

隣から妹の声が聞こえてくる。オレは人の形をした光がいた場所を睨みつけたまま返事を返さなかった。
しばらくして周りの人たちはオレから離れるようにして散らばっていった。弟と妹が心配そうな目でオレを見ている。
オレがまだ人の形をした光がいた場所を睨みつけていると声が聞こえて来た。

「今からチュートリアルを開始します」

オレは驚いて周りを見回して見たが声の主らしい人物はいない。弟と妹もキョロキョロと周りを見ている。

「それではチュートリアルを始めます」

どうやら声はイヤホンをつけた時のように頭の中に直接聞こえているようだ。そう気づいた時に目の前が真っ白になった。

真っ白になったのがもとに戻ると周りは暗く、自分の体だけが見える変な空間にオレは浮いていた。浮いていたというのは、足元に地面の感覚を感じないからだ。

気がつけば弟と妹の姿も消えている。周りを見てももちろん姿は見えない。

「ここはどこだ！」

いくら待っても返事はない。チュートリアルというものが始まる様子もない。

「とりあえずここはどこでもいいからチュートリアルを始めろ！」

「チュートリアルを開始します」

そういうと返事があった、かと思うとオレの体が落下を始める。

「うわぁぁぁ！」

どんどん落下していく。したに地面があるのが見えた。この早さで落下すればオレはぺしゃんこになるだろう。

「うわぁぁぁあああぁぁ！」

オレは恐怖に叫び声をあげながら目から涙があふれる。

地面までの距離があと５０ｍぐらいまで迫る。それと同時に死も迫って来る。
オレは叫びながら迫る死から逃げるために目を閉じた。
すると風の抵抗が弱くなったのを感じた。それでも目をギュッと閉じたまま、オレは叫び続けていた。
しかし、いくら経っても地面に激突しない。オレは少しずつ目を開いた。

「浮いてる……！？」

目を開いて下を見るとオレは地面から１ｍほどの所に浮いていた。否、正確にはとてもゆっくりと落下している。ゆっくりと足が地面に着くと、オレは辺りを見まわした。
ここは地面と言っても半径５ｍほどの円形の台のような形をしていて、地面とオレ以外は真っ暗で見えない。

「おい！　チュートリアルってやつ、始めないのか」

オレは首を上に向けて言った。１０秒ほど待っても返事がない。オレはもう一度言った。

「チュートリアル始めないのか！」

それでも返事は返ってこない。
かと思うと次の瞬間、目の前に芋虫のような生物が現れた。
ソイツは普通の芋虫の２０倍以上の大きさをしていて赤く、黒い筋が血管のように伸びていた。

「な、なんだコイツ！」

オレはソイツを見て後ずさった。ソイツはオレのとこを向いたまま襲ってきたりする様子はない。しかしオレはソイツがいつ襲いかかって来ても対応できるように、ソイツの動きをしっかり見ていた。

「それはワームという名の魔物です」

頭の中に声が聞こえてきた。チュートリアルを始めますと言っていた奴と同じ奴の声だ。

「ワーム？　魔物？」

オレは意味の分からない単語を聞き返した。

「このゲームと混ざった世界によって生まれた生物、それが魔物です。そしてそこにいる魔物の名がワームです」

「……それはわかった。だがチュートリアルって今から何をするんだ？」

オレはとりあえずすべてを受け入れることにして話を進めた。

「今からそこにいる魔物を倒してもらいます」

オレはこの言葉を少しは予想していたが、本当に言われると一瞬自分の耳を疑った。

この魔物を倒す？　オレがこの魔物を倒すって？

オレは見ていると気持ち悪くなってくるような色をしているワームという魔物から目を逸らした。

「無理だ！　こんな化け物を素手で倒すってむちゃ振りだろ！」

「誰も素手で倒せとは言っていません」

そういうとワームとオレの間に剣、槍、斧、弓、杖、弓、銃といった多種多様の武器が出てきた。

「この中から好きな武器を選び、それでワームを倒して下さい」

武器を選べって言われてもこんなの使えねぇよ！

「大丈夫です。重くありませんし、使い方を分からなくてもそこにいるワームは倒せます」

「そうなのか……。てゆうかオレの思考を読んだ！？」

「さあ、武器を取って魔物を倒して下さい」

そう言って声はオレを催促する。

オレはとりあえず武器へゆっくりと歩み寄って行く。ワームはその場所からまったく動かない。

武器が並ぶところまで来ると一度すべて見て、剣に手を伸ばした。剣にも大剣、剣、双剣など種類があるようだ。オレはそれから普通の剣に手を伸ばす。そういえば剣と刀の違いは、両刃かどうかだと何かの漫画で言っていた気がする。

重さを確認して見ると想像していたよりも軽い。２？ぐらいだろう。オレは両手で持って、剣道部がやるように何度か振ってみた。

「…………武器はこれでいい」

落ちついた声でそういうと、剣を両手で持って構えた。

「では、そのワームに攻撃を加えて下さい。なお、そこにいるワームは反撃しません」

「わかった」

オレは短くそういうと、ワームの方へと歩き出した。

残り4、3、2mまで来るとオレは剣を振り上げて、踏み込みと同時にワームを思い切り斬りつけた。

「ギャウウ！」

高い奇声を出して、ワームは空気に溶けるように霧散して消えた。

倒……した？　オレがあの魔物を倒したのか？

「はい。あなたはワームを倒しました」

「本当に、倒したのか……。てゆうか、またオレの思考を読んだ！？」

オレはそう言った後、自分の右手を見た。そこにあるのは、何にも装飾が施されていないシンプルな剣。それを見て、右手をギュッと握った。

「それでは、次に進みます」

「わかった」

短く返事をした。すると地面が揺れ始めた。

「うおっ！？」
ものすごく大きな揺れで体制が保てなくなり、右膝を地面につけた。
ゴゴゴゴゴゴ
そう音を立てながら地面から何かが出てくる。
「これは……！」
大きな揺れと音を立てながら出てきたのは、鳥居だった。少しずつ出てきて、最終的には５０ｍほどの高さまでになった。
「でけぇ……」
「さあ、くぐって下さい」
そう言われ、オレは鳥居に足を向けて歩き出した。
目の前まで来ると一度立ち止まり、もう一度右手をギュッと握ってから鳥居をくぐった。
その瞬間、目の前が真っ暗になった。
「……て、……」
声が聞こえる。どこかで聞いたことある声……のような気がする。

しかし、思い出すことが出来ない。とゆうよりも、思考が働かないのだ。

「お……て、……て」

おてて？　お手手？

「起きて、起きて」

はっきりと聞こえて、オレはゆっくりとまぶたを上げて周りを見渡す。

ここはさっきいたところと同じ円形の狭い地面。右手には先ほど持っていた剣を変わらずに握っている。

「そう言えば、さっきの声は…………」

思考を働かせてさっきの声から、声の主の姿を思い出そうとしてみる。しかし、

「…………思い出せない」

「チュートリアル2を開始します」

「うおっ！？」

頭の中に声が響く。もちろん、先ほどと同じこの『ゲーム』の説明をしていた奴の声だ。決して「起きて、起きて」と言っていた声の主ではない。

「チュートリアル2を開始します」

さっき言ったことをチュートリアル野郎がリピートする。そして同時にワームが2匹地面から魔法のように急に現れた。

よく見ると地面には先ほどと違って幾何学的な模様が書かれている。

「またコイツらを倒すのか？」

「はい」

「わかった」

オレはそれを聞くとワームに向かって歩き出す。

「……しかし先ほどとは違い、攻撃性を持っています」

後から付け足された言葉によってオレの体が瞬時に硬直する。その状態からオレは口だけを動かす。

「攻撃……性……？」

「はい。要するに敵が攻撃してきます」

「……ついに本物のゲームってことか」

オレは平静をできる限り保ちながら言った。

右手が震えているのは単純に死への恐怖ではなく、モンスターを倒したときの爽快感からだった。

「じゃあ、行くぞ」

剣を握ってドキドキと脈を打つ心臓を抑え、少しでもクールになろうとするが脈はむしろ早くなる。
そんなこともお構いなしに一匹のワームが飛びかかったきた。

「シュウー！」

奇怪な鳴き声を上げながらこちらに来るワームをしっかりと見る。飛んでくるスピードは８０？ほどで、十分に見極められる速さだ。タイミングを合わせて剣を振り抜く。

チュイン！

クリティカルヒットという文字が斬った瞬間に目をよぎる。と同時にバチィッという音がして赤い輝きが出る。そしてワームが先ほどと同じように消えた。そしてオレの剣を握っていない左手が自然とガッツポーズをした。

「さあ来い！」

そう叫ぶと右手に何かが当たった感覚がして激痛が走った。

「あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛ーーー！！」

そしてオレは右手を抑えながら悲鳴を上げた。喉から自分が出すことができないような声を叫ぶ。
どれくらいそうしたのかわからないが、自分の声がかすれるぐらいになった頃に声が聞こえた。そして次には右手の激痛が初めからなかったように消え失せた。
右手を見ると何も異常はなかった。

「な、何が……？」
かすれた声でそういうと頭に声が響いてきた。
「今あなたはワームの攻撃の一つ、酸をくらいました」
「さ、酸？」
オレは全身に嫌な汗をかきながら出てきた単語を繰り返す。頭と呂律が回らない。
オレはこのゲームの恐ろしさを少し理解した。そのあとなんとか攻撃を食らわずにワームを倒した。そのあとはＨＰは体力、ＭＰは魔法使用の為の数値などこの世界の基礎をしっかりと学びチュートリアルは終了した。

『ゲーム』の開始から１０ヶ月が経過していた。
「兄ちゃん、あれじゃね？」
「そうみたいだな。シイ、罠はないか？」
隣にいるオレの妹のシイに聞いた。
「大丈夫みたいだよ、お兄ちゃん」
「そうか、開けるぞ」

そう言ってオレは目の前にある宝箱を開けた。

「《金の鍵》で間違いないな。テトラス、頼む」

「ああ、テレポーテーション〈ガウシア〉！」

バックからアイテムを取り出して使うと目の前が真っ白になった。
辺りに色が戻ってくると大きな水晶の前にいた。

ここは〈ガウシア〉。オレ達が住んでいる都市だ。
目の前にある水晶はテレポクリスタルと呼ばれる移動用アイテム
テレポストーンを使用すると一瞬で帰って来れる帰還用の設備だ。
あの世界が変わった日以来、オレ達兄弟３人は３つの秘宝を探し
ていた。

そして、あることがきっかけでオレはギルド『パーティー』を作
り、ギルドリーダーとなった。
『ゲーム』と混ざって以来名前を思い出せなくなったしまったこ
の世界の住民は自分で自分の名前をつけた。
オレの名前はソウカ。弟の名前はレイ。妹の名前はシイ。これも
自分達でつけた名前だ。

ついでにあの日以来、中学の友達とは会っていない。というより
今何をしているのか、どこにいるのか、今生きてるのかも全く分か
らない。だから今すぐにでも探しに行きたい。しかしオレは探しに
は行かない。もちろん探しに行かないのには理由がある。
オレはあの日から戦い敗れて死んで行く人たちをたくさん見てき
たし、今は『パーティー』のギルドリーダーになっているし、一番
の理由はレイとシイはオレに比べてレベルが全然低いことだ。
なので本当は加乃や巫女達を探しに行きたいが、オレは２人にこ
のギルドをついでもらえるようになるまではギルドリーダーをしっ
かり続けるつもりだ。

オレのギルド『パーティー』はギルドランキングで2位の大きなギルドで、平均レベルが40レベでギルドの人数は50人ほどいる。

中学生のガキであるオレがなぜこのギルドをまとめることができるかと言うと、この世界がレベルで成り立っている世界だからであり、オレのレベルはこの世界の全人類中3位であるレベル75だからであった。なぜそんな高レベルなのかというと、ゲームが始まった日からオレは弟達を守らなければという使命感を感じ、夜も全く眠らずに1日24時間（比喩ではない）レベルを上げた結果こうなっていた。

そしてこの世界で最も選択が大切な【CLASS】は【マスター・ソード】というものだった。この【CLASS】は★が1~5（数が大きいほど強い）のうち、★5の【CLASS】なのであった。

なぜ【CLASS】が大切かというと、能力の上昇値が全て【CLASS】で決まるからである。

こんな生活を続けながらオレは、本当にこの世界はゲームなんだな。と、ここ最近実感していた。　そんな生活を送っていたある日、

「リーダー、東の大森林をグラスドラゴンが縄張りにしています」

ギルドメンバーの1人がそう言った。この情報はオレも知っていたものだった。最近ここ周辺にグラスドラゴンが出没したという情報がいくつか耳に入っていたからである。この情報を知らなかったメンバーは「ドラゴンか……」やら「行くのか……？」やらと緊張した声で言っていた。

ドラゴンはいろんなゲームで強いモンスターを象徴する。この世界でもそれは例外ではない。

するとメンバーの中から1人がオレの前に出てきて言った。

「ソウカ、行くのか？」

彼の名はテトラス。このギルドの副リーダーであり、オレが最も信頼を置いている人物である。

「もちろん行く」

オレはみんなに聞こえるようにはっきりとした口調で言った。

「討伐メンバーは最高人数の10人編成で、参加するメンバーは11時間後の夕飯の時に発表する。この件に関しては以上だ」

リーダーらしい口調でそう言い、他にも情報交換して朝のギルド会議を終了した。

ギルド『パーティー』は夕飯を8時に皆で食べることが定例となっている。

そして今は皆が集まり、夕飯を食べている。オレもギルドメンバーに混じってカツ丼を食べていた。こんな所は現実世界なのだ。ついでにケータイ（ほとんど機能なし）も存在する。しかし『ゲーム』が始まった日にアドレス帳の中身は消えてしまった。

皆が食べ終わった頃合いを見計らってオレはグラスドラゴンを討伐するメンバーを告げた。

「メンバーはオレ、テトラス、レイ、シイを入れた前衛4人、後衛3人、サポート3人だ」

ここで少しテトラスとシイとレイの簡単な紹介をしよう。

テトラスのレベルは62で、【CLASS】は★4の【フルバリアナイト】という防御力がオレを上回るほどの防御型の【CLASS】で、攻撃魔法以外の下級魔法を使えるという仲間に1人居るとありがたい【CLASS】である。

レイは58レベで【CLASS】は★4の【マストガンナー】で両手に銃を持っている遠距離戦でかなり強さを発揮する【CLASS】である。

シイは52レベで【CLASS】は★3の【セイン】で中級の回復魔法と下級の攻撃魔法を覚える補助向きの魔法使い系の【CLASS】だ。

オレ達はグラスドラゴンが縄張りとしている大森林に向かっていた。

「切り込んだやつがその戦闘中一番狙われる。だからグラスドラゴンに切り込む役目はオレがやる」

「「「はい！」」」

「それから死人を出さないために、HPは半分以下になったらすぐに下がってサポートに全回してもらえ」

「「「はい！」」」

一通り戦う上での話をした後にオレ達は大森林に到着した。

「はあぁぁぁぁぁ！」

気合いを込めながら剣を振り下ろした。すると目の前にいた赤と紫色をした大きな毛虫が霧散して消えた。

「これでハイウォームは１０体目だな」

手に持った剣を器用に一回転させて横一線に振って腰の鞘に納めた。

「グラスドラゴンいないな、兄ちゃん」

レイが後ろから来て言った。

「お兄ちゃん、情報は本当に確かなの？」

シイが疑うように言ってきた。

「ドラゴン系のモンスターは１日２０時間寝てるんだよ」

「ってことは巣にいるとか？」

「巣って、雛とかいるのかな？」

シイが目を光らせて何か言ったが無視する。

「レイの言うとおり巣だろうな。だからとりあえず洞窟をまず探す」

「洞窟が巣なのか？」

「お兄ちゃん無視するな～」

シイのことは無視する。
「ああ、そうだろうな。洞窟で寝ている様子がよく見かけられている」
「洞窟って、……あんな感じの？」
レイが先に見えるぽっかりと穴が空いた岩壁をみて言った。
「なんかジメジメしてそう……」
「情報通りだな。あれがグラスドラゴンの巣だ。それからもちろん全員入るぞ、シイ」
「今だけ反応するな〜！」
とバカなことを言うシイを無理やり洞窟に引っ張り入れて、そのままずかずかと進んで行く。
「……ソウカ、近いぞ。気配がする」
「テトラス、わかってる。流石にこれくらいの存在感はオレでも感じる」
皆に静かに歩くように言ってゆっくり、慎重に歩いていく。
大きな寝息が聞こえる。音がする方に向かって真っ直ぐ進む。かなり広いところに出た。天井はぱっくり開いる。グラスドラゴンはここから出入りしているのだろう。
そして今オレの目の前にいる大きな緑色の生き物が、

「グラスドラゴン！」
オレはそう叫びながら予定通りグラスドラゴンに【スキル】《鬼神斬り》で斬りかかった。
寝ているグラスドラゴンにしっかりヒットして、剣の軌道に赤いエフェクトが出る。

「グォォォ！」

痛みで叫びながらグラスドラゴンは目を覚ました。そんなことは気にしないで討伐メンバー全員でグラスドラゴンに総攻撃を仕掛ける。
完全に目を覚ましたグラスドラゴンはオレ達の姿を捉えた。

「グオォォォォォォ！！」

グラスドラゴンの咆哮を聞いて体がピリピリとする。
そしてグラスドラゴンは深呼吸をするかのように大きく息を吸い込んで、そのままこちらに向かって紫色のガスを吐き出した。
これはグラスドラゴンの一番高威力の攻撃、ブレスだ！
オレ達前衛はブレスをもろにくらってしまい、ＨＰを３分の１ほど削りとられて毒状態となる。
補足説明をすると、ドラゴン達のブレスにはそれぞれ追加効果がある。例えばファイヤドラゴンなら火傷、アイスドラゴンなら凍傷だ。そしてグラスドラゴンのブレスは毒。その毒の効果により１０秒に１割のＨＰを削りとられて行く。
前衛の内２人に下がってＨＰと毒を回復するように言った。その間は防御の方に徹し、尻尾のなぎ払いや爪による攻撃を剣で受け止める。

１０秒ぐらいして、回復して戻って来た２人と交代してサポートに回復してもらう。
ＨＰと毒を回復するとすぐに前衛のところに戻った。

「大丈夫か？」

戻ってきてすぐに前衛２人のＨＰを横目で確認して、「大丈夫」と返答が来たので安心する。
するとまたグラスドラゴンが大きく息を吸い込んだ。

「《フルバースト》！！」

オレはとっさに【マスター・ソード】で一番威力が高い技をグラスドラゴンに向かって発動した。
剣を振り下ろすとバァチィィ！　と、ものすごい音がしてエフェクトによりオレの視界は一瞬まっ白になる。

「グオォォ！」

ドラゴンは痛そうに叫び、ブレスはオレ達がいる場所と全然違う場所へと放たれた。

「よっしゃ！」

そう言ってオレはそのままドラゴンにを斬っていく。

「グオォォォォ！」

ドラゴンが血走った目をしながら大きな砲哮をした。

「来たか！」

これがボス系のモンスターに見られる行動、第1ポイント通過だ。第1ポイント通過はある程度ダメージを与えると血走った目をするのが特徴だ。この状態になると能力値全般が上がるのだ。

グラスドラゴンがまたもや大きく息を吸い込んだ。

「一斉に攻撃しろ！」

オレはMP温存を考えてあまりMPを使わない《鬼神斬り》で斬りかかる。

残りの前衛3人もそれぞれ威力が高いスキルを発動してダメージを加えていく。

後ろから後衛による魔法や銃弾、矢などがドラゴンにダメージを与えて行くがグラスドラゴンのブレスは止まらない。

一瞬にしてオレのHPが半分になり、他の前衛のHPは3分の1を下回った。

「前衛全員すぐに下がれ！　サポートすぐに全回させろ！」

そう言ってオレ1人残って前衛を下げた。

犠牲者を1人も出さないためにはこれが一番得策だと考えたからだ。

しかし1人で前衛に居るためにすべての攻撃はオレに向かって来る。

「ぐっ！」

全力で防御に徹していく。直撃はないけれどそれでも少しずつダメージをくらっていき、みるみるうちにHPは4分の1を下回った。

そろそろヤバいと思ったところでちょうど前衛3人が戻って来た。
「少しの間頼んだ、回復しに行く」
バックステップですぐさまサポートがいるところまで下がった。
ここまで下がるとグラスドラゴンの攻撃は全く届かない。
「サポート、回復頼む」
サポート3人によってオレのHPはあっという間に限界値まで到達した。
HPが回復すると、すぐさま前衛に戻った。
ドラゴンを見てみるとまだ第1ポイント通過状態である。
オレの情報が正しければドラゴン系のモンスターは第2ポイントがある。
そこで一気に多大なダメージを与えるのがいいだろう。
「第2ポイント通過後のためにMP温存しておけ」
サポートのところにも聞こえる大きな声で言った。
「しかし、第2ポイントがなかったらどうする？」
横からテトラスが言った。
「オレが集めたドラゴン討伐の情報によると、第2ポイントのなかったドラゴンはいないらしい」
「それならいいんだが」

オレは確かな情報があることをテトラスに言って、ドラゴンの攻撃を防ぎ、たまにある隙を見つけて攻撃を加えていく。
そういえばオレが戦ってきたモンスターの中で一番強かったのは……。
ギルドを立てる少し前の時の事を思い出してオレは少し暗い気持ちになった。

「ソウカ！」

テトラスの声が聞こえて慌ててドラゴンの方を見ると目の前にドラゴンの白く鋭利な爪が見え、次の瞬間オレの体に直撃した。

「ぐっ……がっ……あっ……はぁっ！」

地面を3回ほどバウンドして壁に背中から思いきりぶつかり、口から血と酸素を吐いた。
一瞬息ができなくなり、すぐに視界も戻ってくる。

「くっ、くそ……」

ふらふらしながら立ち上がる。あたりどころが良かったらしく。骨は折れていないようだ。
負傷は全身の擦り傷とドラゴンの攻撃によって爪痕が浅く腕に残ったたことだろう。
剣を拾い上げて、すぐに前衛に向かう。

「大丈夫か？」

「ああ、なんとか」

「集中しろ」

テトラスに渇を入れられる。

「わかった。心配かけてごめん」

「ふっ……」

テトラスが笑ったのを横目で見てから目の前のグラスドラゴンをしっかり見据えた。

「ん？」

グラスドラゴンの白かった爪が紫色になっている。
これがまちに待っていた第2ポイント通過だ。

「第2ポイント通過だ！　全力で攻撃しろ！」

総攻撃の合図をだしてオレは《フルバースト》を発動させ、防御を捨ててグラスドラゴンにおもいきり攻撃する。他のメンバー達も防御を捨ててそれぞれ高威力の【スキル】を使ってグラスドラゴンに攻撃していく。皆の【スキル】のエフェクトにより目がチカチカするようなほど眩しい光を出す。
20秒ほど総攻撃が続いた時、

「ギャオォォ！」

と痛がった声を出してグラスドラゴンが翼を広げて空へと飛び上がった。

「何！？」
　グラスドラゴンは一瞬で２００メートルほど上空へ飛んでいく。空に飛び上がってしまっては前衛は愚か、後衛の特定の攻撃しか届かなくなってしまう。
「後衛、サポート！　ＭＰ残ってるか！」
　オレはすぐに確認をとった。しかし、サポート以外メンバーはほとんどＭＰが尽きているようだった。
　オレは空中戦に対抗するための最終手段をとることにした。
「サポート！　前衛全員に《ウィング》のを！！」
「兄ちゃん！　オレも行く！」
「レイ……」
　オレはレイの目を見た。その目は真剣であることをオレに教えた。
　オレはレイが行くことを承諾して言った。
「前衛全員とレイに《ウィング》を！　それからありったけの補助魔法を！」
　サポートはすぐさま魔法の詠唱に取りかかった。
　サポートにウィングの魔法をかけられると背中にバサッと白い羽根が生えた。
　それから攻撃力上昇、防御力上昇といったいろんな補助魔法をかけられた。
　補助効果にはそれぞれ色がついている。７つほどの補助魔法をか

けられてオレ達は七色に輝き、なんというか神々しい感じのオーラをまとった。

「よし、いくぞ！」

オレは羽根を少しピクピクと試しに動かして、上空でこちらを見下ろしているドラゴンを見た。

そして羽根を使って空へ飛び上がった。後ろからレイと前衛達も上がってくる。

ドラゴンのところまで来てみると下の人が見えなくなるほどの高度だった。

「こっからは空中戦の開始だぁー！」

そう言ってオレはドラゴンに斬りかかった。

と横に振るわれたグラスドラゴンの腕を頭を下げて避け、そのまま腹に一太刀を加えた。

それはクリティカルヒットとなって、ドラゴンの腹に傷を付けた。

「グオォォ！」

ドラゴンが怯み、レイ達の追撃を加えられていく。

「まだまだぁー！」

第2ポイントを通過しているグラスドラゴンの高威力の攻撃を一撃もくらわないようにし、オレ達はグラスドラゴンに通常攻撃で攻撃していく。

皆も集中力を増して一撃もくらわないまま2分ほど過ぎたとき、神はオレ達に牙を向始めた。

「うぁぁ！」

前衛の1人の《ウィング》の魔法が解けたのだ。

このゲームでは補助魔法のほとんどが2分から5分で消えてしまう。きっと2分きっかりで消えたのだろう。

「くその神様が！　誰か受け取りに行け！」

この高さから落ちたりでもしたら、確実にあの世行きだろう。

前衛の１人が受け取りに行き、残りの皆にオレは言った。

「あと3分しか保たないぞ！　本気で攻撃しろ！」

そう言ってオレはグラスドラゴンの上空へ周り込み、グラスドラゴンに向かって剣を振り下ろした。

「落ちろぉぉぉー！！」

しかし、オレに気づいたグラスドラゴンがオレの攻撃を避けた。

そしてそのまま海がある方へ向かって飛んでいく。

《ウィング》の魔法が残ってるオレと前衛2人とレイでそれを追いかけて行く。

「レイ！　あれは使えるか！」

「一応使えるけど、外したらヤバいよ！」

「いいから使え！」

「わかった！」
レイの【CALSS】は【マストガンナー】。両手に銃を持っている。そして、レイは【マストガンナー】最強の技を覚えている。
「《ブロークン・ザ・ショック》！」
レイが右手に持っている銃は左手に持っている銃よりも銃の口径が大きい。
そして、そこから銃が反動で壊れる程の銃撃を撃つ！　それが【マストガンナー】の最強技である。
レイの放ったその青色のエフェクトをまとった銃弾は、オレの目じゃ追えないほどの速さでグラスドラゴンの右翼を貫いた。
「落ちてくれ！」
右翼を貫かれてグラスドラゴンはバランスを崩して地面に降下していく。
グラスドラゴンは１００ｍほどを降下したあと体制を立て直した。
「しぶとい奴だ！」
「まだ死なないのか！」
するとここで、
「うわぁぁ！」
前衛の１人の羽根が消えた。

「レイ、助けに行け！」

レイはなんとか間に合い、地上に降ろしに向かった。

「おぉぉ！」

すると前衛もう１人の羽根も消えた。

なんとかソイツをオレが受けとめて、地上に降ろした。

「さて、コイツを倒せるのはオレとレイだけになっちまったな。そろそろ……死ねよこの野郎！」

オレは全力をだしてグラスドラゴンの懐に入り込み、クリティカルヒットとなった一撃をお見舞いした。

「そういえば、お前空中じゃブレス使わねーな」

「グオォォォー！」

「オレの言葉はお前に届かねーか！」

グラスドラゴンのすべての攻撃をすれすれで避けて、グラスドラゴンを何度も斬りつける。

気がつけばオレの補助魔法は《ウィング》以外は消えている。

「グオォォ！」

グラスドラゴンがオレに向かって爪を振り下ろした。

「うあぁぁ！」

グラスドラゴンの攻撃をもろにくらって急降下していく。落ちる速さが早すぎて体制も立て直せずものすごい勢いでオレは下に向かって落ちていく。

このまま地面に落ちていけばオレのHPは0になってしまうだろう。

オレはこのまま死んでしまうのか……？

ドンッ！！

オレの背中に何かがぶつかった。

「兄ちゃん大丈夫か？」

「レイ……。大丈夫、生きてる感じがする」

「兄ちゃんまだウィング消えてないよな？」

「ああ、もう一度突っ込もう！」

「うん！」

レイから離れてオレとレイは急上昇していく。

「レイは援護射撃をしてくれ！」

「わかった！」

オレはグラスドラゴンに向かって飛んでいく。

ずっと空を飛んでいると風になったみたいな変な気分になる。

前からグラスドラゴンもこちらに向かって飛んでくる。グラスドラゴンは右腕を上げてここに向かって来る勢いで振り下ろしてくる。それを頭を下げて避ける。ドラゴンの腕が頭を掠めていく。

時間の流れがゆっくりと感じられる。ドラゴンの動きがとてもスローに見える。レイの銃弾すらも目でしっかり見える。

そのままオレの世界が加速していく。グラスドラゴンが一度に攻撃する間に１０回も斬れる速さでオレはドラゴンを斬っていく。

「まだまだぁ！」

オレの攻撃はだんだんとヒートアップしていく。

もっと速く……。

もっと速く……！

もっと速く……！！

オレの剣が赤くなっていく。ドラゴンを斬る速さで摩擦が起きて熱くなっているのだ。一斬りするたびに剣は熱く、赤くなっていく。

「たぁぁ！　やぁぁ！　はぁぁ！　どうだぁぁー！！」

オレのテンションが極限まで上がった矢先、神はまたもオレの邪魔をした。

「何っ……！？」

オレの羽根が消えて、どんどんドラゴンから遠ざかっていく。

「ここで終わってたまるかぁぁ！！」

オレは右手に持っていた剣をグラスドラゴンに全力で投げた。それにグラスドラゴンも気づいたが、グラスドラゴンが動くよりも早くグラスドラゴンの腹を貫いた。

「グオォォォォ！！」

グラスドラゴンは断末魔の雄叫びを上げて降下し始めた。

「やった……！」

オレの喜びもつかの間だった。オレは下に広がる海に降下していく。

「ここで終わりなのか……？」

ここでオレのステータスが、オレの人生が終わるのか……。
オレが全力をそそいだ人生が終わりを迎えるのか……。
辛い……なぁ。
はぁ……。
オレは死を覚悟してゆっくりまぶたを降ろした。

「キャッーチィー！」

「えっ！？」

目を開くとレイがオレを抱えていた。

「兄ちゃん、大丈夫？」

「おまっ…………ありがとな」

「どう致しまして」

運良くレイはウィングが残って居たようだ。

「そういえば、グラスドラゴンどうした？」

「あれなら消えたよ。今頃レベルアップしてる人もいるんじゃない？」

「そうか……」

「兄ちゃん、帰ろう」

「そうだな」

まだ、終わりじゃなかった。

「え！？」

「何！？」

レイの羽根が消えた。

「くそぉ！」

オレはこの瞬間から神を信じなくなった。

「兄ちゃん！　どうする！」

「……レイ、知ってるか？」

「何を？」

「この世界の海は泳げないらしい」

オレは下に広がっている青い海を見て言った。

「知ってるよ！」

「それから、オレ達が助かる方法が一つだけある」

「何？」

「ここからあそこの崖まで１５ｍぐらいある。つまりあそこまで行けばいいということだ」

「それで？」

「レイ、オレの言うとおりにしろよ」

「わかった」

「まずは右手を貸せ」

レイがオレに右手を出した。オレはその手の手首を掴んだ。

「それから？」

「お前は陸に上がって助かる。オレはお前を助けて心が助かる」

「えっ！？」

オレはレイを陸の方に向かって全力で投げた。

「オレの机の中を見ろ」

「待って兄ちゃん！」

レイは陸に向かって飛んでいき、そこで待ちかまえていたテトラスがレイをキャッチした。

オレは反動で反対方向に飛んだ。

「じゃーな！」

オレは涙を流しながら笑って言った。

バッシャーン！

オレは海に落ちた。

第2章、終

階段に向かいながらレイは言った。

「……兄ちゃんがいない間はオレがギルドを守る」

その声は言った本人にしか聞こえなかった。

レイは屋上の方に向かって階段を一段飛ばしで歩きだした。階段を一番上まで登って、目の前のドアを開けると屋上に出た。屋上は強い風が吹いていて、眠っていて暖かくなったレイの体にはとても心地よかった。

フェンスに寄りかかって海のある方を眺めていると、街が少し騒がしくなっていることに気がついた。

「レベルランキング3位で、ギルドランキング2位のギルド『パーティー』のギルドリーダーである兄ちゃんが行方不明になったんだもんな……」

レイはソウカが海に落ちたあの時のことを思い出してあることに気がついた。

「兄ちゃん……机の中を見ろって言ってたな」

レイは屋上をあとにしてすぐにソウカの部屋へと向かった。

ソウカの部屋につくと、一応ノックしてからレイはソウカの部屋に入った。

中はギルドリーダーの部屋といってもほかのギルドメンバーと変わらない広さだった。

レイはソウカの机に向かい、１段目の引き出しをあけた。中には

特に変わったものはない。続けて2段目、3段目と中を調べていく。
しかし特に変わったものはない。
そして一番下の4段目を開けようとしてみると、
「ん？　開かない……。鍵がかかってるみたいだな」
鍵がないかと引き出しの1段目、2段目、3段目を探してみるが、
鍵穴に合う鍵はない。机の周りを探してみると、
「ん～……どこだ？　……これか？」
机と床の隙間に鍵が落ちているのを発見してそれを取り、鍵穴に
差し込んでみた。
「ぴったりだな……開いた！」
引き出しの中を見てみると、ギルドメンバーの個人情報が入って
いるけで特に変わったものはない。
「兄ちゃん、何を伝えたかったんだ……？」
何かないかとじっくり見ていくと、1つの手紙が入っているのを
見つけた。裏には『レイ、シイ、テトラス、そしてギルドの皆へ
ソウカより』と書いてあった。
「これは……！」
レイはすぐにギルドメンバー全員にギルドの大広間に来るように
とメールを送り、大広間へと向かって走り出した。

ギルド『パーティー』の大広間。そこは基本は昼食や夕食を食べる時に使用する部屋で、『パーティー』の皆が楽々と入れる広さがあり祭り事や決闘などにも使用されるとても広い部屋だ。そして今ギルドメンバー全員が集まって来ていた。
そしてそこの舞台の上にはレイやテトラスがいた。この位置だとギルドメンバーの会話がよく聞こえてくる。その内容は不安がっているものがほとんどだった。

「静かに！」

舞台の上からテトラスが大声で言った。それだけで騒がしかった大広間はシーンと静まる。
静かすぎてギルドの外の音が聞こえてきそうだ。

「今ここに集まってもらったのはレイのメールを見たからだと思う。が、その前にオレから話がある。オレは統治局に行ってレベルランキングを確認してきた」
その言葉のちゃんとした意味を皆知っているので皆の中で緊張が走る。緊張の中、皆が舞台の上に立っているテトラスの言葉を待つ。

「レベルランキング3位に…………………スコアという奴だった」

「そん……な…………！」

大広間がざわつく。「そんな！？」「ウソ……だろ？」とみんな

信じられないといった感じであった。すると1人が言った。
「ランクが落ちた。もしくは上がったって事はないのか？」
「3位のスコアという者は76レベ。4位は72レベでマルマルとカシオ、それより上にソウカという名前はなかった………」
ソウカはもともと75レベで3位、しかし3位にいないということは上がったもしくは下がったとうことになる。
そしてどちらにも名前が存在しないということはランキングから消えた、この世界から消えたということである。
「兄ちゃんが……死んだのか……」
レイはなぜか涙は出なかった。するとテトラスがレイを見て言った。
「そういえば、なんでお前はここにみんなを集めたんだ？」
「あっ……。今から……話す……」
レイは舞台の中央に向かって歩いた。そして中央まで来るとここに集まったギルドメンバーの顔を見周して、
「みんな、聞いてくれ」
ギルドメンバー皆がレイを見つめた。泣いてる人、戸惑う人、話についていけない人、皆の視線がすべてレイに注がれる。
「実は……兄ちゃんの机の中から一つの手紙が見つかった。今から

読むから、静かに聞いていてくれ」
広間がシーンと静まり返った。それを見てレイは手紙を取り出した。
「じゃあ、読むぞ。……レイ、シイ、テトラス、そしてギルドのメンバーへ　ソウカより」
そして手紙の本文を読み始めた。手紙の中身はというとギルドのメンバー皆への言葉や、もし自分が居なくなったらというソウカの言葉だった。
しばらく読み進めていくと手紙に一滴の雫が落ちた。二適、三適とどんどん落ちていく。雫の本はレイの涙だった。
「レイ…………」
「うっ……うっ……」
「続きはオレが読もう」
テトラスがレイの手から手紙を受け取った。そして続きを読み始めた。
「…………弟のレイと妹のシイをギルド『パーティー』の新リーダーとする。副リーダーは変わらずにテトラスとする。　ギルド『パーティー』のリーダー、ソウカ」
この日ギルド『パーティー』のリーダーが変わった。
そして、ギルド『パーティー』の皆が歩みをどんどんと進み始める。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8132s/

変わり行くこの世界

2011年11月28日23時50分発行